

## オトシブミとチョッキリ

### 1. 揺籃<sup>ようらん</sup>=ゆりかご (地図中①地点)

初夏の遊歩道を歩くと、くるくる丸めた青葉が落ちています。また、若葉を見ると、葉の途中に巻物がついていることもあります。巻紙の手紙を想像して、「落とし文」と優雅な名を与えられていますが、作り手によって大きささまざまです。

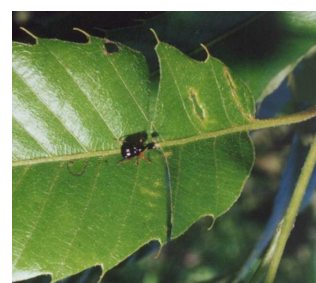
この正体は、甲虫の仲間のオトシブミとよぶグループの虫が、幼虫期間の餌として作ったものです。中に卵が1個産みつけられています。

この作成には、手のこんだ作業が必要です。やわらか過ぎても駄目で、葉のかたさは吟味されます。巻きやすいよう、葉縁から中軸まで切れ込みをいれて萎れさせ、6本の脚をうまく使いながら巻き、最後は解けないように折り込みます。巻く途中で産卵しますが、切り落とすか否かは種類によって異なります。この巻物を子どもを育てる入れ物と考え、揺籃といえます。

首のように見える部分が長い特徴ある形態で、大きさは種によって2cm近いものから2mmくらいまで様々です。利用植物も、種によって決まっているものから、葉のかたさで利用植物を変えて行くものもあります。



エゴツルクビオトシブミの揺籃



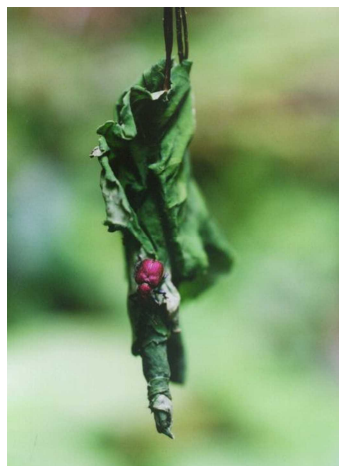
ヒメクロオトシブミ

### 育ててみよう

揺籃を乾かないように、湿った土の上ののせてふたをしておくと、夏には成虫が出てきます。枯れ色になっていても大丈夫です。

### 2. チョッキリ (地図中②地点)

同じように葉を巻いて、中に卵を産むチョッキリと呼ぶ



イタヤハマキチョッキリ

グループがあります。首が短く、巻き方は雑です。虹色の金属光沢をした美麗種もいて、萎れさせるところは同じです。

打吹山で目立つ大型種は、ウリカエデの新芽を巻くイタヤハマキチョッキリです。イタヤカエデの名が付いていますが、他のカエデ類も巻きます。



ヒゲナガオトシブミ

### 注目する樹種

エゴノキ: 白い花が目立つ前の時期の葉 → エゴツルクビオトシブミ

ネジキ: 幹の皮目がねじれている木の下 → ヒゲナガオトシブミ

(倉吉博物館専門委員 國本洸紀 2011)

